

南砺市立学校のあり方検討委員会（会議記録）

【日時】令和8年4月24日（金）開会：午後7時00分 閉会：午後8時50分

【場所】南砺市役所 別館3階大ホール

【出席委員】松山 友之 委員長 齋藤 史朗 副委員長 税光 詩子 委員
曲師 政隆 委員 藤井 一哉 委員 谷戸 仁美 委員
大西 正起 委員 山崎 賢治 委員 橋爪 央樹 委員
松本 久介 委員 鉢蟬 圭伸 委員 富田 利通 委員
東 康紀 委員 戸成 博宣 委員 近川 利行 委員
石崎 里果 委員 井上 明世 委員
酒井 久美子 委員代理（唐嶋 田鶴子 委員）
松居 裕 委員代理（野村 雄亮 委員）
森田 清仁 委員代理（山田 剛 委員）
六十蒨 誠一 委員代理（井瀨 信雄 委員）
野村 昌己 委員代理（野原 宏史 委員）

【欠席委員】浦田 謙太郎 委員 酒井 堅信 委員 南田 哲幸 委員
金道 真一 委員 伊豆 多都子 委員 堀 勉 委員

【事務局員】教育長 松本 謙一 教育部長 氏家 智伸
教育総務課長 片田 健一 教育総務課副参事 金谷 諭
教育総務課主幹 小谷 篤史 教育総務課副主幹 北島 一郎
教育総務課副主幹 青能 順子 教育総務課主任 井上 健

【傍聴者】 3名

【会議要点】

1 開会

2 委員長挨拶 松山委員長

3 協議事項

（1）福光地域の学校統合の確認について

- ・「福光地域の学校統合に関する提言書」を踏まえ、今後、福光地域において統合校の開校の準備を進めていくことを確認した。

（2）市全体としての学校統合の方向性の確認について

- ・「南砺市立学校のあり方に関する提言書」（令和6年1月22日提出）で合意された方向性を維持することを確認した。
- ・すなわち、今後の学校統合に関しては、引き続き地域ごとに「地域学校統合検討委員会」を設置し、地域ごとに統合の方向性を協議する。また、市全体での学校統合の協議については、今後の子どもの人数を確認しながら、福野中学校の改築時期である令和27年頃を見据え、協議を開始する。

- ・ただし、今後の児童生徒数の更なる減少や、教育環境の変化に応じ、おおむね5年を目途としている南砺市立学校のあり方検討委員会の開催の前倒しを検討するなど、委員の意見を踏まえながら柔軟に対応する。

4 今後の検討委員会について

- ・城端地域で統合に関する意見がまとまった場合、開催する。

5 副委員長挨拶 齋藤副委員長

【会議記録詳細】

1 開会

2 委員長挨拶

(委員長)

2年前に開催した第2期南砺市立学校のあり方検討会では、本当に真剣な討議をいただき、一つの方針をまとめられました。その後、それに従って色々なことが着々と進み、その結果、平・上平地域に義務教育学校が設置され、福光地域でも学校統合の方向性がまとまったとお聞きしています。本日は、PTAからも、先に提出された要望書に関するお話があるとお聞きしています。ぜひ、建設的で、前に進むようなお話ができれば幸いです。

3 協議事項

(1) 福光地域の学校統合の確認について

(委員長)

協議事項に入る前に、本日の委員会の開催趣旨について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

お手元の資料2の3ページをご覧ください。赤字で示したとおり、このたび、福光地域の学校統合に関する意見がまとまりました。そのため、赤枠で囲っている「④統合に関する意見がまとまった場合は南砺市立学校のあり方検討委員会をその都度設置し、市全体としての方向性を確認する」という方針に沿い、今回、南砺市立学校のあり方検討委員会を開催する運びとなったものです。

(委員長)

続けて、協議事項「(1) 福光地域の学校統合の確認」について、説明をお願いします。

(事務局)

去る令和8年3月18日に福光地域学校統合検討委員会から、教育委員会に対して「福光地域の学校統合に関する提言書」が提出されました。提言の要旨は、「①統合の時期」に関しては、小学校、中学校ともに令和10年4月1日に統合し、「②統合後の学校数」に関しては、小学校1校・中学校1校とし、「③統合後の校舎」に関しては、統合小学校の校舎は現在の福光中部小学校の校舎、統合中学校の校舎は現在の吉江中学校の校舎とするというものです。

今回の福光地域学校統合検討委員会からの提言は、南砺市立学校のあり方に関する提言書に沿ったものです。以上、ご確認をお願いします。

(委員〇)

福光地域がこのような方向性をまとめられたことに、敬意を表しますし、私も理解しています。

しかし、城端中学校が吉江中学校と一緒にしろうとしても、校舎の収容能力の関係上、少なくともこの先2、3年のうちに統合することはできないとお聞きしています。私は、「統合に当たり、増築や大規模改修はしない」という教育委員会の方針に不満があります。費用がかかるときはかかるわけなので、城端中学校が吉江中学校と一緒にしろるのであれば、城端地域の子どもが吉江中学校に入れるように、校舎など増築したりすると考えるのが一般的だと思いますが、いかがでしょうか。

(委員長)

まず、福光地域の学校統合の確認について進めますので、今ほどお話しされたことは、次の協議事項でお願いします。

福光地域の方には、本当に鋭意努力いただき、こうして提言がまとまりました。委員の皆さんに提言内容を確認いただいたので、今後は、提言内容にあるとおり、令和10年4月の統合校の開校に向け、福光地域で準備を進めていただくということになります。

(2) 市全体としての学校統合の方向性の確認について

(委員長)

次に、「(2) 市全体の学校統合の方向性の確認」についてです。南砺市立学校のあり方に関する提言書では、統合に関する意見がまとまった場合は、市全体としての方向性も確認することとしています。これについて、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

はじめに、お手元の資料3「南砺市全体としての学校統合の方向性の確認について」をご確認ください。まず、「1 現在の市全体としての方向性」について確認します。お手元の資料2「南砺市立学校のあり方に関する提言書」をもとに、確認します。

資料2の「第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書」は、令和6年1月22日に提出されています。提言に至るまでは、資料2の6ページに記載している委員の皆様との複数回にわたる協議を経た上で、学校のあり方に関する基本的な考え方や、その協議の進め方、また、今後の見通しについて合意いただいています。

まず、小学校に関しては、7地域にそれぞれ残すということで、委員の皆様の見解が一致しています。

一方で、中学校に関しては、委員の皆様から多様な意見があり、結果として、「各地域の児童生徒数の変化を示しながら、地域ごとに時期を定めて協議を開始するという手法が、今後の予測不可能な問題に対しても柔軟に対応できる方法であり、かつ、多様な意見をほぼ取り入れることができる方法」として、委員の皆様のご理解をいただきました。今ほど申し上げたことについては、提言書の2ページにも記されています。

これに関しては、第2期の南砺市立学校のあり方検討委員会、すなわち、令和6年1月に提言を取りまとめたその当時は、小学校の単級に関しては問題がないというのが委員の皆様のご総意でした。その一方で、中学校の単級に対しては意見が分かれたため、各地域で「中学校の単級に対する考え方」を含め、地域の考え方を大切にしながら、それぞれの地域で学校のあり方について協議いただくということで、まとまりました。

この考えに基づき、資料2の3ページの「学校のあり方の基本的な考え方」と「学校統合の検討方法の時期の考え方」に沿い、中学校に単級が断続的に生ずる5年前を目途に、地域ごとに学校統合を協議するという形で進めることに、合意いただいています。

「中学校に単級が断続的に生ずる5年前」というのも、先ほど申し上げましたが、「中学校の単級に対する考え方」というのは、委員の皆様の中にも意見が分かれたため、各地域の「中学校の単級に対する考え方」を踏まえ、地域のご意見や考え方を大切にしながら協議を進めるポイントとなる時期ということで、設定したものです。この合意いただいた考え

方に沿って、福光地域学校統合検討委員会と城端地域学校のあり方検討委員会が設置されており、それぞれの地域で学校統合のあり方を協議してきたところです。

また、「学校統合の検討方法・時期」は提言書⑤のとおり、おおむね5年ごとに「南砺市立学校のあり方検討委員会」を設置するとしており、この提言の内容を、今後10年先、20年先も固定し続けるものではないということを、確認しています。

最後に、資料2の4ページを御確認ください。4ページには、年次計画として、「南砺市立学校のあり方これからの見通し」をまとめていますが、そのなかでは、「令和27年頃の福野中学校改築の検討時期を見据え、南砺市全体での統合の協議をすること」としています。そして、これについても、委員の皆様の確認・合意いただきました。したがって、現在の市全体の方向性は、「令和27年頃の福野中学校改築の検討時期を見据え、南砺市全体での統合の協議を開始する」ということであり、それを委員の皆様と確認しており、また、それが南砺市としての方針です。以上が、委員の皆様から合意いただいている「第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書」における方針であり、それが現在の市全体としての方向性です。

資料3にお戻りください。今ほど「南砺市立学校のあり方に関する提言書」を踏まえながら、現在の市全体としての方向を確認しました。続けて、「2 南砺市の教育環境の現況」をご確認ください。これについては、資料に列記していますので、ここでお目通しください。

続けて、「3 子どもの人数について」です。南砺市全体の子どもの人数と、各地域の令和8年4月1日時点の子どもの数は、資料4にまとめています。

子どもの数の状況に関して総括すると、市全体の子どもの数の減少は顕著です。ただし、旧町部のうち、城端地域・井波地域・福光地域に関しては、単級が発生する見込みがある、又は現に単級が発生していますが、今のところ複式学級になる見込みはありません。仮に、今後5年のうちに、一学年の人数が市全体で100人程度に減少したとしても、旧町部では複式学級が編制されないことが想定されるという状況です。

資料4の4ページ以降が各地域の学級数の見通しになります。4ページは、城端地域の学級数の見通しです。こちらは、令和11年度以降に、中学校で断続的に単級が発生する見通しとなっており、これを受け、令和7年2月から「城端地域学校のあり方検討委員会」を立ち上げ、学校のあり方を協議いただいています。

5ページは、井波地域の学級数の見通しです。中学校の1クラスの編制基準が40人から35人になったこともあり、単級が断続的に発生するのは令和18年度以降となっており、令和6年1月の提言時よりも3年後ろ倒しとなっています。「第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書」の提言に沿った形であれば、令和13年度を目途に、井波地域で協議を開始することになります。

6ページ・7ページは、福野地域・福光地域のそれぞれの学級数の見通しです。福野地域は単級が発生する見通しはなく、福光地域では、令和20年度に中学校に単級が発生する見通しです。

なお、0歳から5歳までの子どもの数は、令和8年4月1日時点の住民基本台帳に基づく人数ですので、実際に、小学校1年生になるときは、この数から多少は増減する可能性があります。あくまでも、現時点の見通しということになります。

(事務局)

ここまで、現況を確認いただきましたが、その上で、市全体の方向性について3つの論点を踏まえ、南砺市教育委員会としての検討案を申し上げます。

論点の一つ目は、「子どもの人数の減少状況」です。

確かに、児童生徒数の減少は進んでいます。しかし、旧町部では現時点で複式学級が編制される見通しはなく、一学年の人数が市全体で100人程度になった場合でも、同じように、

旧町部では複式学級が編制される見通しはありません。これは、教育面や学校施設面における現在の南砺市の教育環境の強みを、引き続き生かせるものだと考えています。

そして、先ほどご確認いただきました第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書の年次計画に関しても、令和6年1月に委員の皆様にご確認、ご同意いただいたときと変わらずに、南砺市の教育環境の強みが維持できると考えています。この点を踏まえ、第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書で確認した市全体としての方向性を継続し、協議を進めていくことが望ましいと考えています。

続けて二つ目の論点は「現在の教育環境の評価」です。

先ほど皆様にもご確認いただきました南砺市の教育環境の現況のとおり、現在の教育環境は望ましい状態であると考えてます。また、仮に、今後5年のうちに、一学年の人数が市全体で100人程度になったとしても、旧町部では複式学級が編制されないことが見込まれますので、現在の教育環境は問題なく維持できると想定しています。

最後に三つ目の論点として、一部の方から寄せられている「市全体の統合校を早期に設置すべきである」というご意見に対するものです。

こちらについては、仮に、今後10年前後という期間で、市全体の統合校を新設する場合、長期的な子どもの減少傾向等を踏まえれば、統合時に規模の見合った学校を整備したとしても、短期間のうちに多くの空き教室が出てしまう可能性が高いと考えられます。そして、多くの児童生徒が1箇所に集まることで、グラウンドや体育館などの共有施設が、現在のよりに広く利用できなくなるという可能性もあります。現在は、今ある校舎を活用しながら、落ち着いて教育活動を行っていますが、早期に市全体の統合校を設置することが、結果として現状よりも教育効果が望めない環境を作ってしまうという懸念があると考えています。

(事務局)

以上、ご説明した三つの論点を踏まえ、資料3の結びに記載している検討案についてご説明します。

第一の点として、児童生徒数の減少は続いていますが、一学年の人数が市全体で100人程度になった場合でも、旧町部では複式学級が編制されることがないと想定されますので、一人ひとりに目が行き届きやすく、学校施設をのびのびと利用できるという良好な教育環境を維持できると考えています。

ただし、これが第二の点にもなりますが、この現在の方針を将来に渡ってずっと固定して一切見直さないというわけではありません。例えば、今後、旧町部の子どもの数が更に減少し、複式学級が編制されるような状況にもなれば、今後の教育活動に支障をきたす可能性があると考えています。南砺市立学校のあり方検討委員会は、おおむね5年を目途に開催することとしていますので、今回は、令和13年度を見据えて南砺市立学校のあり方検討委員会を開催することになります。その際は、その時の子どもの数の状況や、教育環境等の最新の状況を踏まえ、現状は令和17年度頃を予定しておりました第3期南砺市立学校のあり方検討委員会を、令和13年度に前倒しして開催するということも考えられると思います。子どもたちにとってどのような方向性が最適なものであるかをしっかりと確認し、今後とも進めていきます。

こうした現在の状況を総合的に判断した上で、南砺市教育委員会としましては、今後も引き続き「南砺市立学校のあり方に関する提言書」の方針を維持する方向で進めたいと考えています。委員長と副委員長をはじめ、地域の代表の方や保護者の代表であるPTAの皆様で、多くの時間をかけて議論して決定した「南砺市の学校のあり方に関する提言書」の方針に沿い、段階的に着実に学校のあり方を検討していくということが、子どもたちの教育環境を第一に考え、着実な対応であると認識しています。

以上から、南砺市教育委員会としては、今後も引き続き、令和6年1月に提言いただきました「南砺市立学校のあり方に関する提言書」の方針を維持する方向で進めたいと考えています。

(事務局)

市全体の方向性に関する議論については、南砺市PTA連絡協議会様（以下「市P連」と表記。敬称略）からもご要望をいただいています。こちらは、資料5をご確認ください。市P連からの要望は、学校のあり方について、市全体として統一性を持った将来ビジョンを早期に明確化するために、「第3期南砺市立学校のあり方検討委員会」の前倒しを要望されているものです。要望事項は資料5の3ページにあるとおりです。

その「第3期南砺市立学校のあり方検討委員会」の設置の趣旨としては、「学校のあり方の検討は各地域での話し合いによって決めるという現在の方針を改め」、「大人や地域の事情によるものではなく、子どもたちの学びにとって何が一番良いかということを主眼に置き」、「専門的な見地から、市として、明確な学校のあり方の全体のビジョンを示してはどうか」という点を提起し、それを踏まえ、「現在の第2期南砺市立学校のあり方検討委員会の方向性が適切なものであるかを検証してはどうか」というものだと伺っています。

この市P連のご要望について、この場をもって南砺市教育委員会の見解を申し上げます。

まず、「令和8年度中に第3期検討委員会を前倒しで開催し、20年後の福野中学校の改築時期を待つのではなく、現在の出生数を踏まえ、10年後を見据えた市全体の統一性ある将来ビジョンを早期に明確化してほしい」というご要望です。

こちらにつきましては、まず、「市全体の将来ビジョン」は、令和6年1月の「南砺市立学校のあり方に関する提言書」の年次計画において、すでに明確に方針をお示ししています。繰り返しになりますが、具体的には、「令和27年頃の福野地域の学校の改築時期を見据え、市全体の統合のあり方を検討する」という方針であり、この方針は、委員の皆様のご確認・合意を経て、提言されています。したがって、市全体の将来ビジョンは、「令和27年頃の福野地域の学校の改築時期を見据え、市全体の統合のあり方を検討する」というものであり、それは、南砺市教育委員会としての明確な方向性です。

続けて、また、「20年後の改築時期を待つのではなく、現在の出生数を踏まえ、10年後を見据えるべき」という点に関してです。

これは、先にご説明したとおり、確かに児童生徒数は減少が続いていますが、令和6年1月の「第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書」を、委員の皆様にご確認・合意をいただいたときと変わらず、一人ひとりに目が行き届きやすく、学校施設をのびのびと利用できるという良好な教育環境を維持できると考えています。そのため、今の時点では、第2期南砺市立学校のあり方検討委員会で確認した方向性を、見直す状況ではないと認識しています。

ただし、先ほども申し上げましたが、万一、旧町部でも年間の出生数が複式学級を編制するような状況になれば、おおむね5年ごとに開催する検討委員会、すなわち、令和13年度に開催する南砺市立学校のあり方検討委員会において、第3期南砺市立学校のあり方検討委員会を早期に設置するなど、そのときの子どもたちの数や教育環境等を踏まえながら、柔軟に対応することを検討します。

また、先ほど申し上げた「令和27年頃の福野中学校の改築時期を見据えて市全体の統合のあり方を検討する」という方針に関しても、教育に深く精通されている大学教授の専門家の委員の皆様や保護者の代表の皆様、地域の代表の皆様と、1年以上の期間をかけて多角的に議論した上で導き出したものになっています。したがって、現時点においては、子どもたちの教育環境や学校施設の状況などを総合的に踏まえた最適な目標設定であると考えます。

さらに、施設面に関しては、南砺市内の学校は、まだ十分にその状態で活用できる校舎が残っています。その中で、10年後という短期間で市全体の統合校を新設しようとするれば、大規模な学校を整備することになります。短期間のうちに多くの空教室が生じてしまう可能性が高いとも考えられますので、現実的ではないと認識しています。

以上を踏まえ、十分な議論を経て決定した第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書の方針に沿い、各地域の状況を見極めながら着実に進めていくということが、今の時点では子どもたちにとっても最良であると考えています。

次に、検討委員会の実施方法などに対するご要望についてです。「大人や地域の事情」ではなく、「子どもたちの学び」を第一とし、保護者や現場の教員に加え、定量的な分析を行える専門家を交えた分科会形式で、十分な時間を確保して協議してほしいというご要望です。

こちらのご要望に関してですが、「子どもたちの学びにとって何が一番良いか」を第一に考えるという視点は、市としても最も大切にしてきた基本姿勢であり、第2期南砺市立学校のあり方検討委員会においても、それを念頭に置いて協議してきました。また、「第2期南砺市立学校のあり方検討委員会」では、大学教授や元教育事務所長といった教育分野に精通されていらっしゃる方にも、ご参画いただいています。教育分野の専門家だけでなく、保護者代表、地域づくり協議会代表、学校関係者など多様な立場の方々が集まり、1年以上かけて十分に議論を重ねてまいりました。

したがって、「第2期南砺市立学校のあり方検討委員会」は、決して地域の都合だけで結論を出しているものではなく、子どもたちの学びのことを第一に考えた上で、専門的な知見と現場の声を十分に反映したプロセスを経て、現在の方向性を導き出しています。この点は、市P連の要望に沿った形のものが、すでにできあがっているものと考えます。

以上が、市P連のご要望に対する市の見解となります。

(事務局)

最後に、市全体の方向性についてです。南砺市教育委員会としては、市P連の皆様のご要望や学校に対する思いをしっかり受け止めつつも、まずはこれまで十分な議論を経て決定された「第2期南砺市立学校のあり方検討委員会」でまとめた方向性を継続し、それに沿って着実に協議を進めていくことが望ましいと考えています。

(委員長)

ご意見やご質問がありましたら、お願いします。

(委員〇)

旧町部の4地域のなかでも子どもの人数に差があるため、学校統合の議論になると、「慌てて議論しなくてもよい」という認識になる地域もあるでしょうから、学校統合の議論に対する地域間での温度差が出ます。

城端地域のことをご理解いただきたいと思っているのは、城端地域が「単級が発生して大変だ」といっても、ほかの地域の人からすれば、自分たちには関係のない話になっているわけです。井波地域は、まだ一度も学校のあり方に関する議論はしていませんし、福野地域も同様です。旧町部でも温度差があるので、市全体で同じ方向性を決めることは難しいですが、今後の方向性を決めるには、この温度差をどのように理解するかだと思います。

(教育長)

各地域で、学校統合の議論の必要性に対する認識が異なるため、第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書では、地域ごとに協議を開始するという形でまとまりました。先ほど、城端中学校が吉江中学校に統合する場合のお話がありましたが、吉江中学校を増築しないからといって、吉江中学校との統合を認めないわけではありません。そのような要望があれば、増築などの対応を検討します。ただし、城端地域で統合の方向性の結論を出すことが先になります。

また、市P連からもご意見をいただいておりますが、先ほど事務局からの説明のとおり、教育委員会としては、令和13年度に開催する南砺市立学校のあり方検討委員会において、第3期南砺市立学校のあり方検討委員会の早期設置がありうることも想定しています。ただ、現在の教育環境を踏まえると、今すぐに設置を前倒しする状況ではないと考えており、この点をご理解いただければと思います。

(委員長)

ほかの地域にも色々とお考えがあると思いますので、ご意見がありましたら、お聞かせいただければと思います。

(委員N)

私は、福光地域学校統合検討委員会を傍聴してきました。「福光地域は福光地域だけで考える」という枠組みで話していましたが、個人的には、「城端地域が福光地域に来るか来ないかわからないなかで話が進んでもどうなのか…」と感じつつ、もしかしたら、統合中学校の校舎を決めるに当たり、「城端地域の中学校が福光地域に来るかもしれないから、吉江中学校がよい」という意見も出てきたのではないかと思います。また、城端地域学校のあり方検討委員会も傍聴しましたが、そのなかでは、「そもそも、城端地域が福光地域の中学校との統合を選択しても、福光地域は受け入れてくれるのか」という意見もありました。

このような状況を見てきたので、福光地域と城端地域が合同で協議する場が設けられなかったことが、正直残念でした。この先、福光地域と城端地域で、中学校をどのようにするか協議するような場があるのか、少し気になります。

(教育長)

城端地域で協議した結果、中学校は福光地域の中学校に統合するという事でまとめれば、福光地域に色々な点を確認し、お願いすることになります。

(委員長)

各地域で意見がまとまってから、次の段階、すなわち、地域をまたぐ合同での協議に入ることになっていますので、これは計画どおりだと思います。

(委員O)

ところで、井口地域に義務教育学校を設置したとき、教育委員会で井口地域の父兄の考えや意見を聞いてきたのですか。部活動もほとんどないような小規模な学校に通いたい、また、通わせたいか、子どもたちや親が本当にどのように考えているのかどうかを、教育委員会で検討したことはあるのですか。

(委員T)

井口地域づくり協議会です。当時は複式学級も編制されていて不安な状況でしたが、そのなかで義務教育学校を設置いただきました。小規模な学校で育った子どもたちが、どういう高校生、大学生、社会人になるのかという不安もありましたが、高校や大学で、特に物怖じせずに大規模な集団にも溶け込んでいます。それを見ると、義務教育学校も間違いではなかったと思います。ただ、当然、合う場合と合わない場合もあるので、一概には言えません。私のような意見をもった保護者もいたと思いますし、納得いかずに他地域の学校に行った保護者もいます。

話は戻りますが、井口地域に義務教育学校を設置するに当たっては、このような地域の意見を聞き取って議論した上で、南砺市教育委員会と調整してきました。

(委員長)

議論を進めた上で、設置したということですね。そのほかいかがでしょうか。

(委員B)

当時、小学校校長会の代表を務めていたときは、内心では、「小学校は近いところにあってほしいが、中学校はそれなりの規模があったものが1、2校あればよい」と思っていました。

しかし、今の仕事に就き、就学する子どもや保護者と一緒に学校見学をしたり、保護者と面談したりするなかで、小規模な学校に行きたいと思っている子どもが思った以上に多いと感じるようになりました。

先ほど、地域間で温度差があるという話がありましたが、同じ地域のなかでも温度差はあると思います。同じ地域のなかでも、大規模な学校に行きたいという子どももいれば、小規模な学校のほうがよいと考える子どももいます。市P連の要望書に、「子どもの思いが大事」だとありますが、それはそのとおりです。また、学校のあり方の今後の見通しが知りたいというお気持ちは、もちろん分かります。ただ、今は特認校制度もありますので、子どもにも学校を選ぶ権利が保障されていますし、子どもの多様なニーズに応えることを考えると、「今こうしましょう」と決めてしまうのはどうか…という思いも少しあります。

(委員M)

今のご意見にすごく近いです。この学校統合に関し、城端地域でも少しお話をお聞きしました。保護者の意見はたくさん出てきましたが、一番の当事者である子どもたちの声や意見が、その話合いのなかでほとんど聞こえてこないと感じました。南砺市は、他の地域に先駆けて「こどもの権利条例」を制定しています。それこそ、一番の当事者である子どもたちがどう思うのかを踏まえれば、「子どもたちにとってどのような学校がよいか」ということが、はっきりと見えてくるのではないのでしょうか。

例えば、この検討委員会とは別に、子どもの視点を組み込むための協議会を設置したり、総合学習の時間などに、南砺市の現状を伝えた上で、メリットやデメリットを含め、子どもたちに学校のあり方を議論してもらうのはどうでしょうか。大人だけで決めてしまうと、子どもたちはきっと、「大人が決めたからそうになってしまう」という考えになります。子どもたちの視点による提案をその都度聞き、最適な方法を考えていくのも、一つの方法として考えられると思います。子どもたち自身が色々な意見を持ち、地域や南砺市のことを考えながら子どもたちで提案することが、未来の南砺市の子どもたちにもつながると思います。

(委員O)

様々な方面から意見を聞くという方針は、一見すれば、民主的でよさそうです。しかし、学校のあり方という政治的で地域的なことが絡む分野のことを、地域に何年議論させても、結論が出るわけがありません。普通は、市長や教育委員会が方針を示すものです。その上で、市や教育委員会で決めた方針に対し、地域から色々な意見を言うのは問題ないのであって、私がかねてからそうあるべきだと思っています。

(委員長)

第2期南砺市立学校のあり方検討委員会では、御指摘の部分についても十分に議論した上で決めているので、この点については、ご理解いただけていると考えています。

さて、事務局から市P連の要望に対する見解の説明がありましたが、委員の皆様からご意見をお聞かせいただけたらと思います。

(委員K)

昨年度、市P連から要望を提出しました。この要望は、第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書が出されて以降、市内15校の皆さんと議論するなかでまとめたものです。その提出した要望について、補足説明します。

第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書が出されて以降、福光地域や城端地域で議論が開始され、議論が進むごとに皆さんの当事者意識が高まり、具体的な課題や困りごとが深掘りされてきたと実感します。そのなかで、城端地域に関しては、「市全体で学校をどのようにしていくかというビジョンがない」ため、「城端地域に義務教育学校を設置するのか、それとも、中学校は他地域と統合するのかを決めるための判断材料に欠ける」という意見をたくさん聞くようになりました。

さて、人口減少について触れますが、資料5の5ページに、第2次南砺市総合計画の改定版の一部を添付しています。2025年度の出生数は152人でしたが、その数は、第2次南砺市総合計画では2040年頃の数値となっています。令和4年に第2期南砺市立学校のあり方検討委員会を開催しましたが、本来は、令和7年頃に開催すべきところを、出生数の急減を理由に前倒しで開催したという事実もあります。今のこの状況は、我々が議論し、提言を出したときの当時の状況とは、大きく異なった想定外のものと捉えています。我々PTA関係者は、この検討委員会で色々と議論し、提言を出した立場ではありますが、やはりこのままではまずいという認識を持っているため、市P連として要望書を提出しました。

要望書には、「現在の出生数を踏まえ、10年後の学校のあり方を議論したい」旨を記載していますが、これは、「10年後に学校を統合したい」という趣旨ではありません。現状では令和27年頃の福野中学校の改築を見据えて市全体の統合を協議することになっていますが、もしかしたら、そのタイミングは令和27年かもしれませんし、それよりも更に前かもしれません。また、将来的な学校のあり方として、小規模校とある程度の中規模校に再編する形が望ましいのか、それとも、各地域に義務教育学校を残す形に再編するのかといった具合に、色々な選択肢があると思います。このように、南砺市全体としてどのような方向性を目指すのかということについて議論しないと、各地域の議論だけではまとまらないフェーズになっていると考えています。したがって、第3期南砺市立学校のあり方検討委員会を前倒しで開催したいというよりも、今後は第2期南砺市立学校あり方に関する提言書の延長線で進めるのではなく、第3期南砺市立学校のあり方検討委員会という次のフェーズに形を整理した上で、今後は協議を進めていくべきではないかということをお願いしています。

また、検討委員会の開催方法についてですが、私自身、福光地域、城端地域、平・上平地域の会議を傍聴しましたが、「地域」に左右された議論になってしまっているというのが、正直な感想でした。子どものため、子どもファーストという考えを皆さんお持ちなのですが、やはり、どうしても、「子どもたちにとってどうか」という視点よりも、自分たちの地域に学校を残すか、どの地域の学校と一緒にするかという議論になりがちです。

それでは、どのような決め方にすべきかということ、委員の選出に関しては、これまでの趣旨に沿った形で、現行の要綱に従えばよいと思います。ただ、実際の協議や議論に当たっては、「子どもたちのため」という視点は第一になりますが、当然、お金も無限にあるわけではなく、実際に、城端地域学校のあり方検討委員会では、教育委員会から示された吉江中学校への統合可能時期が、建物の関係上、当初の説明から後ろ倒しに変更された経緯もあります。市P連としても、校舎の増改築などの学校に要する費用が、未来の子どもたちの負担にならないようにすべきだと思っており、要望書では「分科会」と記載していますが、分科会ではこのようなことも含めて議論すべきだと整理しています。

先ほどの教育委員会のご説明では、このままでは、令和13年度までこの検討委員会が開催されないという話でしたが、このような議論を継続的にしないと、学校を取り巻く状況の変化に対応ができなくなるのではないのでしょうか。だからこそ、今の南砺市立学校あり方に関する提言書に基づいて進めるという方向性を今一度見直し、早期に次のフェーズに形を整理し、学校のあり方の方向性を皆さんで議論すべきだと考えています。

(委員N)

福光地域は学校統合の方向性がまとまりましたが、これで決して安泰ではなく、20年後には、また次の展開も想定されます。福光地域は、ようやく他の地域と同じ土俵に乗ったといえるところもあるので、今の出生数もある程度考慮した検討が必要になると感じます。

(教育長)

先ほども申し上げましたが、そのようなご要望があるので、第3期南砺市立学校のあり方検討委員会の早期設置がありうることも相当程度に想定しています。ただ、福光地域がこれ

から統合校の開校に向けて話を進めていく段階にあり、そして、今後5年間は問題ない教育環境を維持できると考えるため、今すぐに前倒して検討を開始する状況ではないと考えています。

(委員K)

福光地域の学校統合は理解しています。しかし、城端地域が議論されているなかで、「市全体の方向性がまとまらない限り、判断しづらい」という意見があることに対しては、どのように考えればよいでしょうか。

(委員G)

私は城端地域のあり方検討委員を務めています。皆さんのお話にもあるとおり、城端地域では大変揉めています。学校の再編パターンについて、保護者にもアンケートを取っており、最初の頃は、やはり、地域で子どもを育てたいということで、義務教育学校がよいという意見が非常に多く、義務教育学校：他地域の中学校と統合＝8：2でした。しかし、議論を重ねていくごとに、「中学生は、多く人数がいる学校で色々なことを学んでほしい」という意見も増え、最新のアンケートでは、義務教育学校：他地域の中学校と統合＝6：4、ないしは、ほぼ半々という結果になっています。

先ほど、B委員から御発言がありましたが、私もそれに同感です。子どものことを第一に考えたときに、大規模な学校で学びたい子もいれば、地元の小規模な学校で学びたいという子もいて、そういった子どもの声も大事にしなければなりません。しかし、どちらを選択するにしても、選ばれなかった選択肢を支持する人への説明が大事になるため、決めかねている状況です。

仮に、福光地域の中学校と一緒にする場合、それは令和15年度以降になると聞いていますが、万一、その5年後か10年後に、南砺市全体での統合校を建設する方向性が出たとすれば、城端地域はわずか数年のために議論を重ねたことになりかねません。ある程度ビジョンを提示いただければ、そのビジョンに向かっていくなかで、どのような形で城端地域の学校は残っていくのかが検討しやすくなります。将来的なビジョンのようなものを提示いただければ、城端地域はもっと協議が先に進むと考えています。

(委員M)

昨年、市P連の理事会に参加し、城端地域と福光地域の学校統合の進捗状況について、何度も意見交換していました。やはり、この先のビジョンが不明瞭のように思います。例えば、義務教育学校を設置したところがゴールなのか、それとも、もう少し先に更に統合があるのか。それさえ分からずに議論しても、議論しづらいと感じます。「20年先の明確なゴールが見えていれば、そのゴールに向かってどのようなプロセスを進めればよいか、議論しやすいのですが」という意見を多く聞きます。

第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書の「福野中学校の校舎の改築時期を見据えて市全体での統合を検討する」とありますが、市全体で1校に統合することがゴールなのか、それとも単に検討することがゴールなのか。解釈の仕方によって異なり、市の方向性が全く分かりません。市P連の要望書は、この点も指摘していると思います。

(教育長)

ゴールについてご指摘をいただきましたが、令和27年頃の福野中学校の改築時期を見据えた協議については、地域ごとでの協議ではなく、市全体での協議を考えなくてはならない時期だということをお示ししています。しかし、その協議は、絶対に市全体で1校に統合するというものではありません。今後の教育環境などの諸状況が読めないなかで、将来的に市全体で1校統合するというのを、今の時点で決めることは望ましくないと考えています。やはり、第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書に沿いながら、これから南砺市が進め

ていく教育を評価した上で協議する必要がありますし、その時の保護者と子どもたちと相談しながら方向性を決めることとなります。

令和27年頃を見据えた協議、もしかしたら、令和23年頃を見据えた協議に前倒されるかもしれませんが、それまでの間は、地域ごとに協議いただいた上で、その地域が最もよいと考える学校のあり方に基づき、学校を残します。これが今の第2期南砺市立あり方検討委員会で確認してきた方向性です。

(委員A)

20年後の正確な見出しを出すのは難しいですが、何らかの予測をもとに、教育委員会で一定の見出しを立て、それを随時提示すれば、皆さんも考えやすくなるのではないのでしょうか。

また、「福野中学校の校舎の改築を機に」や、「早期の統合校の設置により、多くの空き教室ができることは望ましくない」といった、建物、すなわちハード面に囚われた記述があり、そこが気になります。

(教育長)

ハード面について言及しているその裏には、現在の少人数での教育がよいと考えており、今の状態を少しでも長く続けたいという思いがあります。規模が大きめで、一教室に35人がギリギリ入るような状態の学校よりも、最大でも一学年3クラスで、校長が全員の子どもの名前を覚えられるような規模の学校のほうが、人間教育にもよいと考えています。

しかし、令和27年頃にもなれば、市内にたくさん学校を建設できるはずもなく、今の状態がいつまでも続けられるわけではありません。そのため、福野中学校の改築時期を見据えるタイミングでは、各地域ではなく、南砺市全体で考えざるをえません。そのときには、こちらとしては残念ですが、規模の大きめな学校になる可能性もあります。

南砺市の学校は、校舎や体育館も比較的新しく、子どもたちにとってよい環境を問題なく維持できます。今の状態をできるだけ続けたいというのが今の教育委員会の考えであり、これが少しでも長く続いたほうが、子どもたちにとっても幸せだと考えています。だからこそ今の環境を続けていくことをお願いしています。

(委員A)

今回の委員会で、教育委員会の考えを教育長からはっきりと言っていただけでしたので、よかったです。

(委員長)

ここで、話をまとめたいと思います。

一つ目は、今後の方向性です。第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書がまとまってから2年経過し、そのなかで、福光地域で学校統合の方向性がまとまりました。ここから、もう一度全てを動かすことも難しいように思いますので、私としては、先ほど教育委員会から説明があったとおり、第2期南砺市立学校のあり方検討委員会で確認した方向性を継続し、今後もそれに従って協議を進めていくことでお願いしたいと思います。

二つ目に、今後の学校統合の協議については、現在協議中の城端地域も含め、各地域の学校統合検討委員会で議論を進め、決めていただくことになろうかと思えます。

そして、三つ目に、南砺市立学校のあり方検討委員会の開催は、おおむね5年ごとを目途にしていますが、皆さんからご意見やご要望を踏まえ、それに応じて開催時期を検討することを、この委員会での共通認識とします。

この三点を、本日の検討委員会のまとめにしたいと思いますが、いかがでしょうか。

(委員K)

一つ提案です。この先、城端地域で統合に関する意見がまとまれば、もう一度、南砺市立学校のあり方検討委員会が開催されます。一方で、私も過去に城端地域学校のあり方検討委

員会を4回傍聴してきましたが、先ほどG委員から「将来的なビジョンがないと、なかなか城端地域でも決められない」という話があったとおり、議論が平行線のまま進まず、結論がまとまらない可能性もあります。

いずれの場合にしても、もう一度この場に立ち帰り、先ほど市P連から提案した「将来的にどうするべきか」という話を協議したり、先ほど教育長が話された教育委員会の考えを委員が理解する場としてもう一度集まり、検討委員会を開催するのはいかがでしょうか。

(教育長)

城端地域がうまくまとまらなかった場合も含め、どのような方法があるか、教育委員会で検討させてください。

(委員K)

そうであれば、資料3に記載した教育委員会の提案どおりにしか進まないように思えます。極端かもしれませんが、我々は何のために本日集まって議論したのかとならないでしょうか。今ほど申し上げた提案は、第2期南砺市立学校のあり方に関する提言書の方向性を継続するという方向性に沿って出した案です。

(委員長)

本日議論いただいたことは、公表される議事録にも残り、そして、今後の協議のなかで必ず活きますので、決して無駄にならないですし、ここで全部の議論が終わるわけでもないと思います。今ほどのご意見は、十分に伝わっていると理解していますので、ぜひ、色々なところで議論し、ご相談いただきながら、話を進めていただければと思います。

4 今後の検討委員会について

(事務局)

城端地域学校のあり方検討委員会で統合に関する意見がまとまった場合は、今回のように、学校のあり方検討委員会を開催することになるので、その際はまた調整します。

5 副委員長挨拶

(副委員長)

本日報告があった福光地域の学校統合ですが、その提言に至るまでには、地域の代表の方や保護者代表の方に、アンケート等を通じて何回も所属団体の意見を集約していただきました。その丁寧な議論が、今回の結論に至ったと思っていますし、今後の学校統合に当たっての非常によいひな形になると思います。

さて、子どもの出生数が減っていくことは大きな変化の一つですが、教育にまつわる状況も年々変わっています。かつては、1クラス35人なんて考えられませんでした。今ではそうになっています。部活動も、学校で面倒を見るという時代から、地域やクラブで面倒を見る時代になっています。これだけ急速に子どもの数が減っているのは、南砺市や富山県だけでなく、全国的な問題ですので、文部科学省の政策の指針も、だんだんと変わってくるのではないかと思います。

「よりよい学校のあり方とは何か」という主題に戻りますが、とにかく規模の大きい学校にすればよいという考えの下、統合だけで話を進めることが、「学校のあり方検討委員会」の役割ではないと思います。複式学級は避けるべきだと考えますが、1クラス内の子どもの数が減っても、学級数が減らなければ教員数は減らないので、学校施設がきれいに整備されているならば、1クラス内の子どもの数が減る段階であれば、全くマイナスにはなりません。

また、300人～600人程度の規模の学校に在籍する子どもが、小規模な学校に在籍する子どもに比べ、何でもできる子どもに育つかといたら、そうでもありません。私は南砺

市内の大規模校と小規模校の両方に勤務した経験がありますが、例えば、小規模校を卒業した子どもたちのなかにも、大規模なところに進学し、生徒会長を務めた人もいます。中学校までは人数が少ない分、ほとんどの子どもたちに役割があり、発言や行動する機会も増えるので、その時に培った経験を、大規模な集団に入った後に活かしているのです。一方で、人数が比較的多い学校になると、役割を与えられる機会も少なくなりますし、教室ではたくさん意見を言う子どももいれば、ただ周りを眺めているだけの子どもも一定数います。さらに、小規模校であれば、一日のうち、先生に一言も声をかけられなかったというような子どもは、まず出てきません。しかし、全校児童生徒が400人、500人もいれば、絶対に一人ひとりに声をかけることはできません。

したがって、人数が多いことが絶対的によいのではなく、大規模にも小規模にもそれぞれメリットとデメリットがあります。南砺市として、今の現状でどのような学校が一番理想的なのかということ念頭に置きながら、学校統合についても考えていく必要があります。しかし、先ほど申し上げたとおり、教育にまつわる状況は年々変わっていますので、第2期南砺市立学校のあり方検討委員会で確認した方向性のとおり、検討委員会を開催して現状を分析しながら方針を考え、あまりにも急激な変化があれば、その時の教育委員会の判断も含めて対応すればよいと思います。

このようなことを踏まえながら、この検討委員会で前向きに議論を進めていかないといけないと思いますので、どうかよろしくお願いします。